

# 回廊にて



Story By: Makoto NEKOYA

無数の打ち上げ花火が同時に炸裂したような、瞬き続ける光の粒が視界一杯を覆い尽くしている。超高速の個体の群れが豪雨となって降り注ぎ、無形の破壊力の波濤が正面からぶつかり合い、砕け散り、巨大な爆発となって空間を揺るがせる。

砕け散ったエネルギーの破片に一撃された戦艦が危険宙域へはじき出され、異様な重力場の顎あごにくわえ込まれる。将兵たちが恐怖の目を瞪る中、不幸な戦艦の艦体が歪み、崩れ、そして粉々に砕け散っていく。

何隻かの戦艦が八方向から集中する光の刃に切り刻まれ、燦然たる焰の中にその輪郭を沈め、不吉なほどに煌めく純白の火球から無数の破片を飛び散らせる。動力炉をぶち抜かれた巡洋艦が制動を失ってきりきり舞いし、艦首を宙雷にむしり取られた駆逐艦の放った主砲射撃が航宙母艦を串刺しにする。宙雷が誘爆し、動力伝導路にそって線形に焰が噴き上がる。炎に一閃された兵士が瞬時に燃え上がり、奇怪な死の舞踏を踊り狂ってフロアに倒れ伏す。衝撃波が通路を通り抜け、紙でも引きちぎるよつに隔壁を突き抜ける。熱すぎた缶詰が破裂するよつに戦艦が内側から膨れ上がり、無数の亀裂から鮮血に似た爆発光を撒き散らしながら四散していく。

宇宙暦八〇〇年五月。

かつて人類を二分した勢力の狭間。両者をつなぐただ二つの回廊の裡の一。イゼルローン回廊は、人類の史上、最も激しい戦いのさなかにある。そう、かつて存在した銀河帝国と自由惑星同盟は、いずれもがその役目を終え、歴史の中の闇に姿を消しつつある。今やイゼルローン回廊の覇権を争うのは、『人類を二分した』と称するには差のありすぎる二つの勢力。皇帝ラインハルトの率いる新銀河帝国と、ヤン・ウェンリーをその軍事指導者に戴くエル・ファシル共和国。あるいはヤン不正規隊<sup>イレギュラーズ</sup>。

「そう、あくまで私は軍事面の指揮官であるべきなんだ。戦いは手段でしかない。それによって何らかの政治的な成果を引き出すためのね。目的と手段を取り違えてしまえば、戦いを止めることは永久にできなくなる。以前の同盟と帝国のように」

誰に向かって語った言葉だったのか、この時のヤンにはやや不分明だった。ユリアンだったと思うのだが、ひよっとしたらシェーンコップだったかも知れない。

ひっきりなしに怒号が飛び交い、ミサイルの炸裂と中和磁場に食い込むビームの放つ銀白色の閃光、慣性中和装置ですら吸収しきれなくなった衝撃が『ヒューベリオン』の巨体を揺るがせる。

ムライ参謀長が振り返った。沈毅な表情に、この時ばかり

は憔悴の色が濃い。

「閣下、部隊左翼・天底方向に新たな敵です。高速戦艦群、おそらくは黒色<sup>シュワッツ・ランツェンシュタイン</sup>騎兵艦隊と思われます」

「アッテンボローに連絡。無人艦隊を側面から突っ込ませると同時に、敵の右側面に回り込んで火力を集中。メルカッツ艦隊にも連絡、敵の進路が変わったら側面攻撃を」

即決で指示を与えてから、ヤンは視線を巡らした。

フロアを突き上げ、身体ごと持つて行かれそうな左右の激震の中で、それでもヤンは指揮デスクの上に胡座をかけた姿勢を崩さなかった。津波を思わせる、激烈なまでの帝国軍の波状攻撃の中、次々に指示を飛ばし、反撃し、崩れかけた戦線を埋め、帝国の猛烈な攻勢を弾き返し続ける。飲み物を口に運ぶ暇もなく、物思いに心を巡らせる時間もありそうになどい、その中で、ヤンの視線は数百万キロを隔てた虚空へ飛んでいる。

「皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルトと戦うのは手段であって、目的ではないんだ。皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルトが我々の主張に僅かでも耳を傾けてくれれば、それで目的の大半は達したことになる」

「それはまた、細やかな目的ですな」

心えた声の記憶が、話題を共にした人物を思い起こさせた。『どうせなら、彼の華麗なる皇帝<sup>カイザー</sup>を打倒して、宇宙に覇を唱える、くらいの気概でいてくださると、兵の志気が上がり

ますまい」

シェーンコップが半ば以上本気であることをヤンは正確に察していた。

「あなただつて、皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルトと正面から戦いたい。正面から戦つて、用兵の優劣を競つてみたいと思われたのではないのですか？」

「そう思うくらいなら、二年前にバーミリオンでやっているよ。帝国と同盟、それからフェザーンを合わせた人口は全部で四〇〇億ほどだね。昔、地球はたった一つの惑星で一〇〇億近い人口を持っていたんだし、ゴルデンバウム王朝が始まったころには三〇〇億近くを数えたと言われている。四〇〇億ばかりの人間と一緒に住んでいくのに、この宇宙と言うところは決して狭くはない。その程度のことからいへど、皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルトは私との戦いに夢中にはなっていない……と期待したいね」

相手の鋭鋒を逸らしつつ、ヤンは韜晦<sup>ごまかす</sup>する。韜晦せざるを得ないほどに、シェーンコップの、ヤンの心理への洞察が正鵠の半ばを射抜いていることを認めずにはいられなかったのだ。

「複数の政体が一つの宇宙に並立してあつたつていい。それを分らないほど、皇帝<sup>カイザー</sup>が愚かであるとは、私は思いたくない」

皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルト。過去数百年に於いて、人類の持ち得た最も輝かしい個性。黄金の髪とオーラを全身に纏い付けた有翼獅子の化身。新たな覇王。その覇王と戦い、『敗北』ではない何からしらを得ようと知囊の限りを絞り尽くす時、確かに全身の細胞が昂揚し、躍り出していくような感覚を味わうことがある。しぶしぶながらにしても、それが充実感であり、ある意味での幸福であると認めざるを得ないヤンだった。昂揚は、同時に底なしの恐怖をも併う。シェーンコップは無論のこと、ユリアンや、フレデリカにも語ったことのない虚無の感覚は、目的自体への根元的な疑問から生じている。至近弾の炸裂が『ヒューベリオン』の艦体を軋ませ、金属的な破壊音と振動とが重なり合つて轟き渡る。シャルチアン艦長の叫びと、それに応じる士官の声が交錯した。

ヤン不正規隊の名の下に艦艇二万数千隻、兵員三〇〇万弱一五万隻を超える帝国軍に較べれば、螳螂<sup>てんとう</sup>の斧というにも愚かなほどに細やかな、しかし、膨大すぎる生命。その大半を虚空に撒き散らして終わるかも知れないと考えれば、それはただ一人の個人の精神を支えるには巨大すぎる犠牲にほかならない。

『民主共和制とは、人民が自由意思によつて自分たち自身の体制と精神を貶める政体のことか』

痛烈なまでのラインハルト……当時はローエングラム元帥……の言葉は、それが灼きつくほどの鋭さを孕んではいた